

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## In Search of the Chicanos in New Mexico : a Journey from New Mexico to Mexico

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004611">https://doi.org/10.15021/00004611</a>

## アメリカ合衆国にラテン

### を求めて

——ニュー・メキシコ  
からメキシコへの旅——

黒田悦子\*

#### はじめに

1976年7月9日から同年10月17日まで、私はアメリカからメキシコにかけて調査旅行をした。今回の調査は昭和51年度文部省科学研究費補助金による海外学術調査「米国における民族諸集団とその価値体系に関する文化人類学的研究——民族性の伝達と文化的多元主義との関係——」

(研究代表者、綾部恒雄九州大学教授)の一環をなすものであった。

旅程から言うと、1976年7月9日に東京を発ち、ニュー・メキシコ州のアルバカーキーに7月10日より9月25日まで滞在し、スペイン系およびメキシコ系の人々の調査につとめ、9月26日にはテキサス経由でメキシコに入った。メキシコ市ではメキシコ系アメリカ人を研究している Bustamante 教授と会った。その後、オアハカにむかい、以前私がいたミへの村を訪れた。こんな時間の経緯なので、時の流れとテーマ別に話題を以下にしたい。

#### 1. ニュー・メキシコ州にみるメキシコの文化的伝統

サウス・ウェストの五州はその地図上の広がりから言うと、合衆国の3分の1を占めている。1848年にメキシコがグアダルルーベ・イダルゴ条約で手離すまではメキシコの領土であった。ここから現今のスペイン系とメキシコ系のアメリカ人の苦勞も出てくるわけであるけれども、政治・経済の表面だけをみないで、文化・美術的な面に目を移してみると、今もってサウス・ウェストは北部メキシコ文化圏の一部と言える。

##### 1) 教会建築

この地の教会建築はプエブロ・インディアン建築スタイルがベースになっている。タオス・プエブロ(写真1)の旧教会は殆どくずれさっているが、昔のプエブロ型教会の一部が残り、他は墓地になってしまっていた(写真2)。ランチョ・デ・タオスに在るサン・フランシスコ・デ・アッシジ教会(写真3)はプエブロ・スタイルが教会建築に採用されている典型的な例と見られた。スペイン系アメリカ人の村チマヨールの教会(写真4)にもプエブロ・スタイルが取り入れられている。美術書を見ると、サウス・ウェストの諸々の辺境にまで植民地時代の教会の廃墟が残っており、これはカリフォルニアからテキサスに広がっていたメキシコ・カトリック文化の残存したものである。

ニュー・メキシコでも都市の豊かな教会ほど時代の移るごとに改築され、美術上の価値は低い。アルバカーキーのプラ

\* 国立民族学博物館第4研究部



図 1

(ブリタニカ地図をもとに著者が作成した)

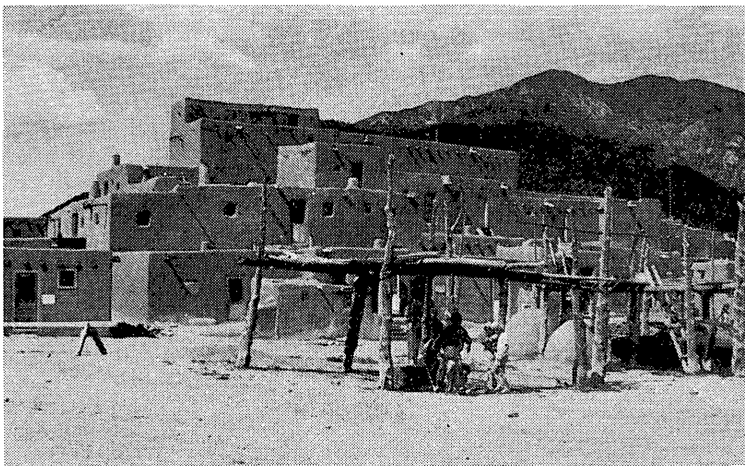


写真1 タオスのプエブロ

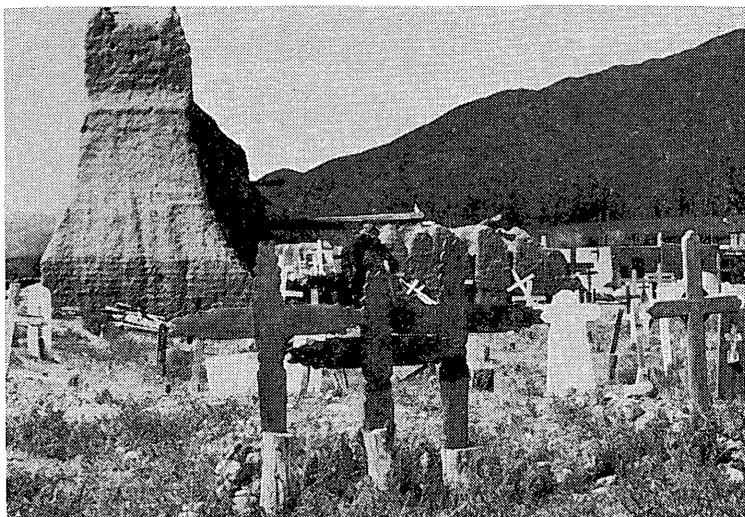


写真2 タオスの旧教会跡

サ・ヴィエハにあるサン・フェリッペ・デ・ネリ教会はその例であった。

## 2) 木彫のサント像とペニテンテ

チマヨールの教会にはアルバカーキーについてから2日目に訪れたので、そのサント像の素朴なスタイルには気がついていった。チマヨールほどでなくても、ふるい教会には木彫のサント像が残っていることが多い。この地の木彫のサントについ

て諸家はニュー・メキシコ独特のサントと言うけれども、私はそうは思わない。何処でも文明の中心から離れた辺境の地や昔からの土地の伝統の根強い土地では、公式のサントの姿は土地風に修正され、各々独特の味が出てくる。ミへの山村の教会でも同じことで、教区の中心があったような村の教会ほど規格品のサントが並び、辺境の村々ほどインディオ風のまろやかなサントが教会を飾ってい

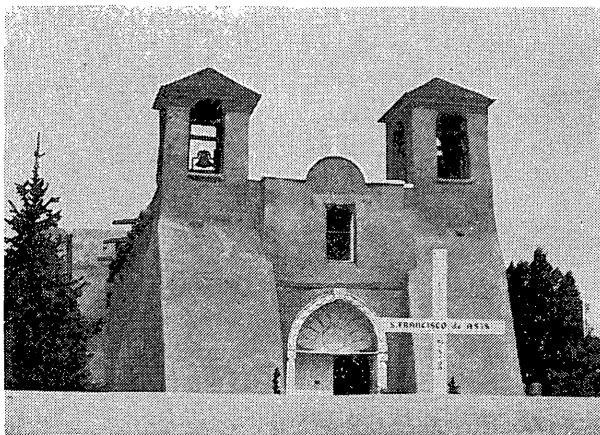


写真3 ランチョ・デ・タオスの教会

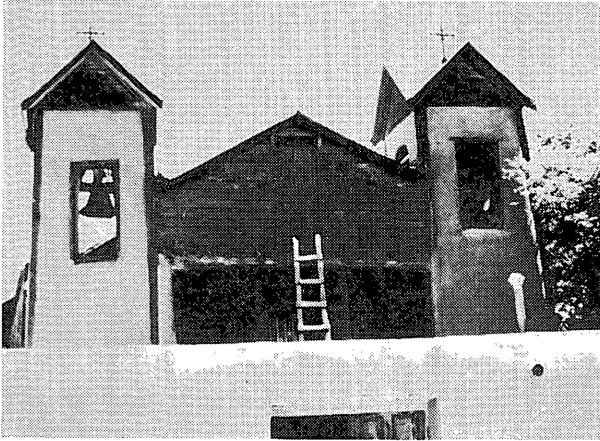


写真4 チマヨールの教会

た。

ニュー・メキシコのサント像で独特のものはペニテンテの儀礼に使われた十字架上のキリストであろう。私の調査のインフォーマントの中にも昔ペニテンテの成員だった人がいたが、このペニテンテは既に消滅に近い。ペニテンテとは復活祭の聖なる金曜日にキリストが背おった十字架の重みと苦しみを自ら再演することによって成員権が与えられる宗教結社である。インディアンの襲撃をおそれながら、孤立した辺境に住まざるをえなかったスペイン系の人々がつくり出した一種の相互扶助組織である。この組織と儀礼については Marta Weigle 教授の労作が最近出版された。

私がかねがね四旬節と復活祭の儀礼についてまとめたいと思っていたので、ペニテンテの存在は材料を一つふやしてくれた。これはニュー・メキシコにきた思わぬ収穫の一つであった。ミへの復活祭のデータを集めていて、一つだけ不満が出てきた。その儀礼が余りにも正統的な典礼とバイブルの話の筋のドラマ化に終わっていて、一切の逸脱がみられない

ことである。一切のカーニヴァルの要素が欠けている。そこで、他の中米の民族についてのモノグラフをみている内に、ヤキやコーラ族ほど激しく劇的なものでなくても、種々の逸脱のパターンがあることがよくわかった。ペニテンテはその一つである。

復活祭の儀礼の一要素としてのペニテンテなら、多くの地域から報告されているが、私が問題にしているのは、激しい鞭打ちと恐怖を伴うペニテンテである。メキシコではミチョアカン州から1940年代までの習俗として報告されている。今回はニュー・メキシコの北部のスペイン系の村々についての文献例に出会うこととなり、幸いであった。それに刺激されて、復活祭の儀礼に独特のスタイルを持つヤキについての文献を入手することに努めた。

この種の研究はラテン・アメリカでは現時点でおこなえるのに、ニュー・メキシコでは歴史学の研究分野となっており、ペニテンテの専門家 Weigle 先生も人類学者というより民俗学者であった。

### 3) 家具、調度品、家の建築

北部ニュー・メキシコのイスパーノ（スペイン系の住民、メキシコ系アメリカ人より区別して、イスパーノと呼ばれる）の古い家に入ると、家具、調度品にメキシコで見た品々や彫刻を見出す。家や教会の建築をみても、天井の組み方や軒のひさしの取り方にメキシコを感じさせる。ミチョアカン州にいるのではないかと、錯覚のおこる時もあった。

ニュー・メキシコのイスパーノはメキシコのことを古いメキシコと呼ぶが、植民地時代から1848年まで同じ国であったのだから、ここにメキシコ的なものが多いのも当然な話であった。イスパーノは毎年キャラバンをメキシコに送り、物品の交換を行なったということである。私も国境の町エル・パソまで友人のLindaと車を飛ばしたが、キャラバンは更に南下したのだった。アメリカ領になってから最初の司教になったLamyは、教区の認可書類を取りにメキシコ市におもむき帰還するまで何カ月も馬の旅をしたということであった。

そのような文化上の交流史については歴史家が多く文献を提供しているが、私も交流の二、三の例に会った。国境からさして遠くないソコロの近くは昔からメキシコとの往来が多く、今でも正式の書類なくアメリカ領に入ってくるメキシコ人の通過点となっている。そして、今でも不法入国者を援助する場所があり、一宿一飯の恩義をえるメキシコ人は数少なくない、という話であった。

また、北部の町ラス・ヴェガスを訪れた時も文化交流史の一端にふれることがあった。この町は白人アメリカ人とイス

パーノとが鉄道をはさんで二分化され、対立してきたことで有名な町であるが、30年代の大恐慌以来すっかりさびれてしまった。街の古いスペイン風建築をみても郊外にでて、温泉地として知られているモンテツマについた。山のふもとに城のような建物が見え、川の近くには昔のボイラー・ルームと見える建造物の残骸があった。これはカトリックのセミナリオのあったところで、1925—30年代にメキシコでカトリックの聖職者への迫害があった時、多くのメキシコ人神父が避難の場を求めてきた、ということである。

メキシコに着いてからこの話を歴史家にききただと、これは史実であった。今でもこの伝統は残っていて、メキシコからきた神父につれられてきた親族がそのままラス・ヴェガスに居ついた、という例もあった。このような例からうかがえるように、ラス・ヴェガスのような北部の町でも、メキシコは文化的に近い国であった。

### 4) 壁画

メキシコの壁画芸術は世界的に知られてはいるが、メキシコ系の民族がたしかに芸術上の素質に恵まれていることを今度あらためて感じた。上にのべたモンテツマにむかう途中にある小さな村の教会の人口の正面の壁はキリストの復活をテーマにした絵でうまっていた（写真5）。野原の真中でこういう作品にでくわすと、画一化されたアメリカ社会の中に根づよく生きつづけているチカーノ（スペイン系、メキシコ系の区別をとわず、これらを政治上統合する用語、1960年代から広く使用されはじめた）の感性

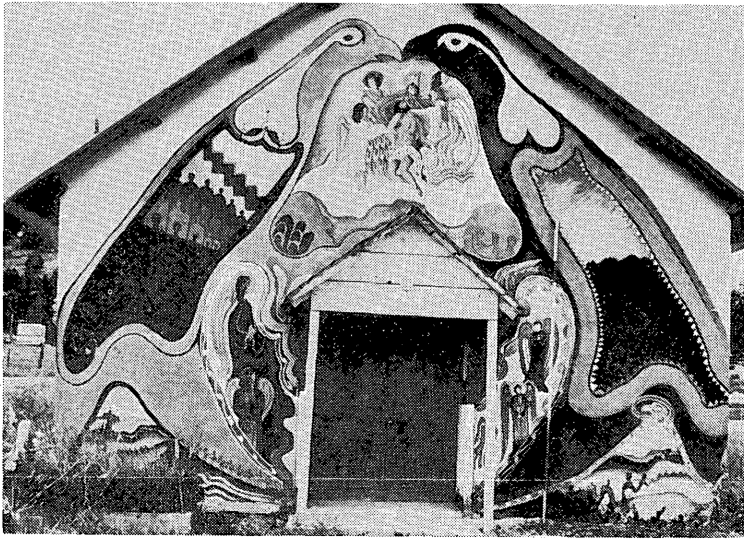


写真5 モンテツマ近くの教会の壁画

と精神を見た思いがした。

サンタ・フェの町には14カ所チカーノの壁画があったらしいけれども、市民の反対が強く、壁画は消されてしまった、ということであった。町の中では交差点で1カ所壁画を見ただけであった。しかし、サンタ・フェからアルバカーキーに戻るハイ・ウェイの左手には自由をうた

うテーマと一見してわかる壁画(写真6)がみえた。

大学のキャンパスにはチカーノの壁画が多く、これは1960年代の後半から1970年代のはじめにかけて高揚したチカーノ運動の産物であった。ラス・ヴェガスのハイランド大学の野外壁画やカフェテリアのメキシコの歴史を描いた壁画(写真

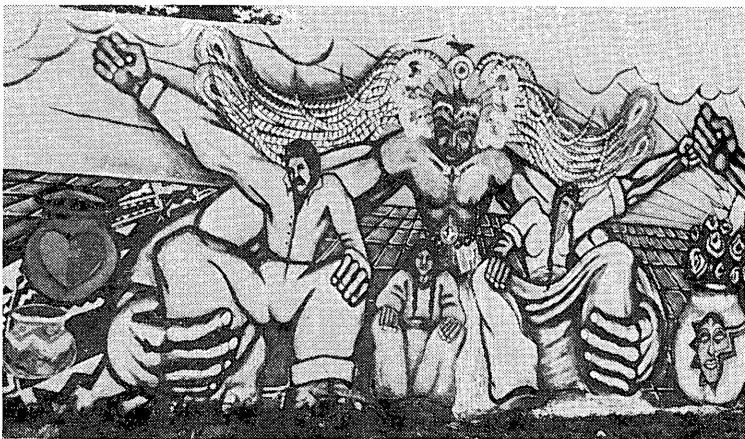


写真6 サンタ・フェの壁画



写真7 ラス・ヴェガスのハイランド大学の壁画

7) は学生の意識を伝えていた。アルバカーキーではニュー・メキシコ大学のキャンパスのすぐ近くの一軒家の横壁面に二元的な世界をテーマにしたものがみられた(写真8)。大学構内ではチカーノ研究所の入口にチカーノ・スタイルのデ

ザインがみうけられる。9月に訪れたイースト・ロス・アンジェルス・カレッジでもチカーノの壁画をみたが、同市のオリンピック街にあると聞いた壁画の群をみる時間はなかった。

以上のような例は政治上の訴えのため

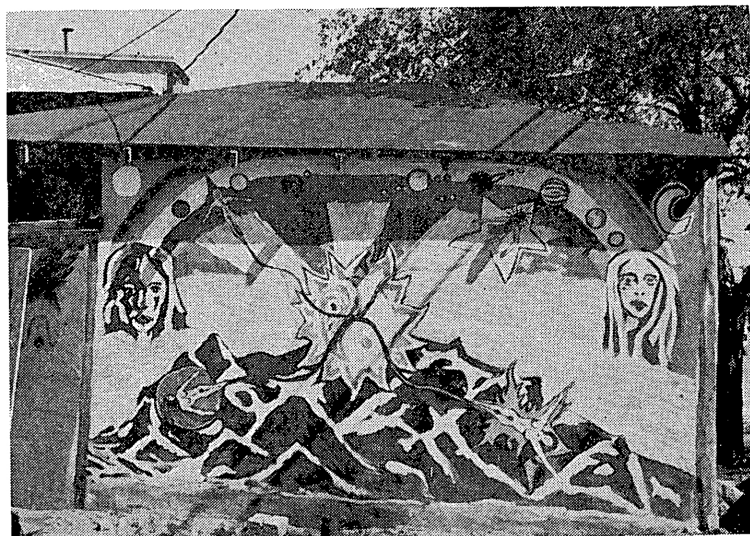


写真8 アルバカーキーのニュー・メキシコ大学近くの壁画





写真9 エスパニョラのグアダルーペ

の壁画であるけれども、宗教的な題材のものもあった。北部の村エスパニョラにあるエル・パラグアスと名づけられたメキシコ料理店の外の横壁面にはグアダルーペの聖女が一面に描かれている（写真9）。アルバカーキーのチカーノのバリオであるマルチネス・タウンのプラサにもグアダルーペとファン・ディエゴが描かれている（写真10）。カリフォルニアの農場労働者の組織者として評価の高い

セサル・チャーベスのストライキの旗印にもグアダルーペは出てくる。

メキシコ系民族の住む所いたるところにグアダルーペあり、なのである。このシンボルはまことに有効なシンボルであった。私のいたミへの村でも近年グアダルーペのシンボルの進出は顕著であり、エリック・ウルフもその有名なグアダルーペ論でのべているように、グアダルーペの聖女のシンボルはナショナリズムと



写真10 アルバカーキー市マルチネス・タウンのグアダルーペ

いつも結びついている。

### 5) 音楽, 芸能, 文学

サンタ・フェのフィエスタは実に楽しい祭であった。この祭は1690年のドン・ディエゴ・ヴァルガスによるサンタ・フェの再征服を祝うものである。

9月3日、ロサリオ教会でのミサで祭は始まり、同夜ソブラ（悲しみを表現するハリコの人形）を焼くことで、象徴的に悲しみの時の終焉が示され、にぎやかなフィエスタの時が始まる。9月4日には露店が軒をならべ、メキシコ料理、インディアンの料理が売られる。インディアンはプラサをかこむ回廊にならび、トルコ石や銀細工のアクセサリーを売る。大司教のロベルト・サンチェスは翌日催される歴史劇でドン・ディエゴ・ヴァルガスを演じる若者をナイトに叙し、フィエスタのクイーンに冠を与える。

フィエスタの山場は9月5日の日曜日であった。朝の9時30分にはサン・フランシスコ大聖堂に行列がおこなわれ、10時には大司教のマリアッチ・ミサ、そして、午後の2時にはプラサより2キロ離れたフォート・マーシー・ボール・パー

クでドン・ディエゴ・ヴァルガスのサンタ・フェ入場が再演され、俗にこれはエントラーダと呼ばれている。9月6日の月曜日にはロデオがあり、クイーンのパレードが終るとフィエスタは終る。

この4日間のフィエスタのうち、私は日曜の部分しか見物していない。祭の雰囲気は多分に観光客向きであったが、祭そのものの要素はメキシコ風であった。プラサで流される音楽もダンスもグアダラハラ調のもの、北メキシコものが多かった。大司教のミサの後、大聖堂の前ではグアダラハラから呼ばれたマリアッチ楽団が次々と演奏し、まわりにはソブレロをつけた男達が正装して立っていた（写真11）。一方、プラサから離れたところに開かれた白人の経営する市の入口ではカントリー・ウェスタンが演奏された。

マリアッチ・ミサはどこでも普及してきた。私はメキシコにいた時、クエルナバカのサント・フランシスコ教会ではじめてマリアッチ・ミサを聞いた。この教会の神父は革新派神父グループのリーダーで、若者をミサに誘うためマリアッチ・ミサをはじめた。オアハカ平野の村エト

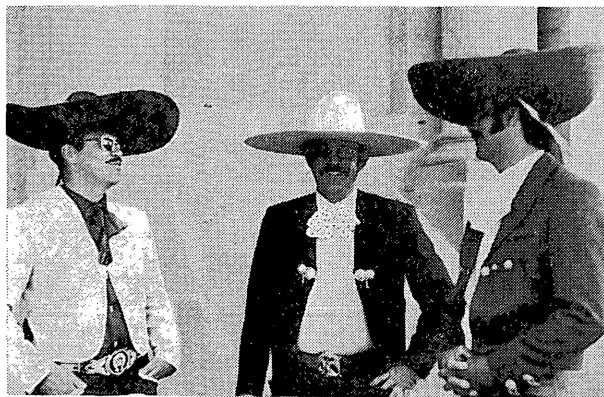


写真11 サンタ・フェの祭を祝うイスパーノ

ラでもマリアッチ・ミサが行なわれていた。また、アルバカーキー市のマルチネス・タウンの祭でも守護聖人のサン・イグナシオのためのミサはマリアッチ・ミサであった。

新しい要素が多くなった反面、伝統的な音楽や踊りもまだ生きている。マルチネス・タウンのフィエスタでは植民地時代のダンスであるマタチネスがみられ、クリスマスにはパストレースが演じられる、ということである。踊り手はアルバカーキー近くの山村のイスパーノの村からくる。メキシコ中央部から北部に分布するマタチネス・ダンスは、フランシスコ派の布教にともなってニュー・メキシコにもたらされたものである。踊り手の衣裳は新しくなり、小道具も安物にすり替っている。それでも、マタチネスの基本的な型は受け継がれていた。植民地時代のダンスの形はイパサーノの村、ヘニサロ（スペイン化したインディアン）の村、インディアン村、それぞれに異なり、この様々な変形はこの地のスペイン的要素に興味を持っている研究者には面白いテーマになるとおもわれる。

スペイン系、メキシコ系の人々は芸術的才能に恵まれ、普通なら散文的に終ることを実に上手にフィエスタ化していく。これはかねがね感嘆している民族的素質なのだが、9月16日のメキシコ独立記念日を祝う会で再度その思いを新たにした。友人の José と Linda がチカーノ出版社パハリートを経営しており、チカーノ主義に賛同する多勢の人がこの会に招待された。まず、ボリビアの若い画家が自分の絵を並べて、そのテーマを説明した。メキシコ料理が出、子供達のグアダラハラ調の踊りが終ると、詩の朗読が始まっ

た。最初に、ロス・アンジェルスからきた若者がピアノをひきながら政治的な訴えにみちた詩をうたった。次に、テキサスのサン・アントニオのバリオの詩人として有名なアンヘラが生活の詩を、ついで、アルバカーキーの主婦が自然の美をたたえる詩をよんだ。チカーノ運動の訴えが音楽に、詩に表現された豊かな夜だった。

ニュー・メキシコのイスパーノの小説家 Rudolfo Anaya に会ったのもこの会であった。風貌も感性も北部出身のイスパーノであった。Anaya, Ulibarri Sabine, Orlando Romero によって代表されるイスパーノの文学は、他の地域のチカーノ文学とは題材も表現も異なっている。イスパーノの感受性がメキシコ系のものとは相当異なることを示すよい例である。

カリフォルニア・チカーノの文学は激しい政治上の訴えである。ニュー・メキシコのイスパーノの文学は、失われていく北部の村々の生活への愛惜の詩であり、表現はロマンチズム一色である。時として、余りにも情感にみちている。同じ対象を扱っても、アングロ系のアメリカ人の手にかかると、それはアングロ的な叙述の確かさとウィットに色づけられる。John Nichols の *Milagro Beanfield War* はその好例である。イスパーノの描く北部の村の世界は自然と人間の織りなすロマンであり、アングロ・アメリカンの描く北部の村はリアリスティックでペーンズにあふれた人間世界である。

## 2. スペイン系およびメキシコ系アメリカ人調査の対象設定をめぐって ——都市人類学の問題点——

今度の調査は短期間だったが、都市での人類学的調査の問題点について感じるところが多かった。日本を発つ前に入手した文献はわずかに3冊であり、アルバカーキー市の北方にあるイスパーノの村で宗教と社会組織の調査をする気持でいた。そして、綾部先生より御紹介いただいた Karl Schwerin 先生の指導をたよりにしてアルバカーキーについた。

7月11日につくと、12日、13日にはペニテンテ研究の第一人者である Marta Weigle 先生と北部のイスパーノの歴史と文化の研究者 Francis Swadesh 先生に会い、北部の村について御意見をうかがった。翌14日には Karl Schwerin 先生の同行をねがって、サンタ・フェより北上し、チマヨ、コルドヴァ、サンタ・クルス、エスパニョラ、およびその周辺の村々をみた。この村々の中からフィールドを一つ選ばうとしたが、それはむづかかった。

これらのイスパーノの村は都市から遠く離れているけれども、既に1930年代の大恐慌の頃よりアメリカ生活にくみこまれていた。伝統文化のダイナミックな姿は文献資料の上にはしか求められず、伝統やフォークローリックな面はフィクションとして成り立っているだけであった。村人も昼間はロス・アラモスの原子力研究所に車で通勤する人が多く、その生活の型は現代アメリカであった。

次の4日間はニュー・メキシコ大学の売店でチカーノの文献を買い求め、大学のツィーマン図書館で修士論文の棚を

探し、関係する論文を入手した。そうしている内に、アルバカーキーにチカーノのバリオが5つほどあることを知り、そのうち最もまとまりのよいマルチネス・タウンを調査したらどうか、と思うようになった。さっそく、教会の神父さんに電話し、バリオ内に住めるよう手配を依頼した。ところが、部屋数も少なく、安全性に保証のないバリオなので、なかなか部屋も家も探すことはできなかった。その間、私は大学指定のモーターに住み、マルチネス・タウンに何回もおもむき、何人かのインフォーマントを得た。

この同じ期間に、ニュー・メキシコ大学のチカーノ研究所の所長 Antonio Mondregón 氏に会い、Linda と Teresa という二人のテキサス育ちのメキシコ系アメリカ人女性に紹介された。この2人を通じて、チカーノ主義の学生や中産階層の人々にはじめて会った。また、マルチネス・タウンに入っているプレスビテリアン近隣扶助機関の Kent James 氏と Gerry Roblyer 氏を通じてマルチネス・タウンへの接近も活発におこなっていた。

マルチネス・タウンにはあまりにも下層のクラスの人々が多すぎて、ここを調べても、チカーノの民族的特性、ニュー・メキシコに特異なイスパーノとメキシカンとの共存、チカーノ運動の動向、などという私が知るべき大きな流れに触れずに終るだろう、という懸念があった。また、マルチネス・タウンには私がいつもフィールドに求める自然さが欠けていた。政府、民間、教会のジョイント・プロジェクトによる援助と改良政策が矢つぎばやに実施され、バリオは援助計画の実験室のようになり、人々は援助なれし

すぎていた。

インフォーマントを得るむつかしさは、たとえバリオ内に住んでも減少することはないことも知った。非アングロ系民族といっても、バリオ内の他家を訪れることはまれで、アメリカ生活のプライベートの壁は高かった。

こうして、北部の村、マルチネス・タウンと試行錯誤を続けている内に、私は自分の考えに大きな誤りを見出した。コミュニティを一定の空間上に求めすぎているから、苦しむのであった。現実にチカーノは動いている。アメリカ社会だから、私より動きは大きい。村とか町を把えないで家族か個人を押えるしかないのだ、と考えた。

ニュー・メキシコでは16世紀以来住みついているイスパノの伝統が強く、かならずしもチカーノ運動に統合されないこと、チカーノには下層と同時に中産階層の人も多いし、州の人口の30%を占めるチカーノは政治上でも有力である、ことを知った。この点、ニュー・メキシコの状況はカリフォルニア、テキサス、中西部、東部のチカーノの置かれている状況とは異質である。あれやこれやの現実がわかってくると、7月の下旬には調査の目的と方法について決断をおこなった。

アルバカーキー市のチカーノ（イスパノとメキシコ系アメリカ人を含む）の民族的・文化的特性を求めて、色々な階層からインフォーマントをえて、インタビューを行なうことにした。期間と対象からみて、概括的な調査に終ることはわかっているのだから、きわめておおまかなクエッションネアールをつくった。スペインおよびメキシコの文化的社会的特性を

決定すると考えられる項目を次々と取り出し、インフォーマントから資料をえて、私なりに持っているスペイン・メキシコ文化についての知識で検討し、チカーノの実態と文化的特性をさぐるうとしてみた。インタビューの項目は次のようである。

1. 生活歴
2. 経験した差別
3. 家族
4. コンパドラスゴ
5. 教会と宗教観
6. 食事とクランデリズム
7. 言語
8. 政治参加と自意識

各項目の中に小項目を詳細に立てることこそ重要なのだが、日一日とインタビューと読書を通じてチカーノへの知識が深まってはじめてできることであって、最初から小項目を立てることはできなかつた。だから、私のインタビューの資料も最後の方のインフォーマントになるほど資料として確かで、詳しい。知識が深まって、小項目まで操れるようになったからであった。

とにかく、上記の調査に私はふみきつた。私の手にある残り60日という期間にはこの方法しかなかった。今回は一次調査と理解して、このインタビュー形式にのり出した。こうして、33人のインフォーマントとのインタビューをこなし、この地のチカーノについての概要をこころをえて、私は9月26日アルバカーキーを去った。

この調査のデータと分析は「ニュー・メキシコ州アルバカーキー市におけるチカーノの文化的特性とチカーノ主義運動——彼等の意識の調査——」（仮題）と

題して、1977年に研究グループのメンバーと共に発表する予定なので、今は触れない。ここでは、上記の調査を行なっている間に感じた都市での調査に関する問題点に少しふれておきたい。

私は自分が都市で調査をすることになろうとは思っていなかったので、今回の経験は色々勉強になった。ミへのようなインディオ社会を扱った直後だったので、色々面くらった、というのが現実であった。アメリカではチカーノの研究は社会学者、政治学者、教育学者、ジャーナリスト、各地のチカーノ研究所の人々がたずさわっていて、人類学の人とはとりあげようとはしていない。ニュー・メキシコの場合は異例で、イスパーノの存在があるので、民族学者、民俗学者が関与している。メキシコでは社会学の専門分野となっている。

フィールドとする市や町のサイズは本人の力量に応じて選ばないと、致命傷になる。日本にいる時、ロス・アンジェルス近郊のチカーノの調査を考えたこともあった。しかし、ロスを選んだりすると、車を運転しない私では調査がすまない。たとえ運転しても、こんな大都会では動くだけで疲れ、インフォーマントをえることがむづかしい。ロスをえらぶかぎりにはチカーノの集中して住んでいるバリオを探すより手はない。もっとも、メキシコ系労働者の多い農場をえらぶこともありうる。

アルバカーキーは人口約38万で、町の端から端まで車に乗っても20分以内で走れる。静かな大学町なので、人の人情も厚く、インフォーマントも得やすい。イスパーノとメキシコ系アメリカ人の共存しているチカーノ研究上特異な場であっ

たということも利点であった。このアルバカーキーの選択は綾部先生の御提案によるもので、私には実にありがたかった。

車の国アメリカでは車なしには生活はむづかしい。アメリカでは車で動きまわって、アメリカ的に活動しないと、インフォーマントに会えない。アルバカーキー市が小さいので、私はタクシーで動き、またインフォーマントの親切な送り迎えにもたよれたが、そんな調査は小さな町か小都市でないときできない。アルバカーキーの運転手にはイスパーノ系の人が多く、乗車中にあれこれと話ができて、これは思わぬ収穫であった。

集中的な調査なら、家族と同居するのが一番よいだろう。しかし、概括的な調査となれば、必ずしも家族と住む必要はない。自分自身の生活が保証され、夜には本も読め、テレビのニュースにもふられる利点を生かして、アメリカ社会の情報をのみこんでおきながら、人脈と電話を活用して、アメリカ的に動くより仕方がない。私は大学の近くのモーテルに住みつづけた。途中でアパートに移ることも考えたが、モーテルは地味だが人気のある住み易いところだったせいか、往來するアメリカ人も多く、この人々をながめるだけでも退屈しない良さがあつた。色々不便もあつたが、思わぬ利点もあつた。カフェテリアのウェイトレスから1人、ルーム・メイドから2人のインフォーマントを得ることにもなったからである。

チカーノの心情はラテンであるけれども、日常生活はアメリカ生活に組み込まれているから、ラテンとアメリカを混ぜてつきあわなくてはならない。アポイントメントはアメリカ風にキチキチ果さな

くてはならないけれども、つきあいの関係はラテン的である。二つの要素が交差する要<sup>かなめ</sup>をこころえて対処しなくてはならない。ということは、やはりチカーノの存在に共感し、賛同するだけの情熱を持っていないとむづかしい。農村社会であろうと都市のチカーノであろうと、対象をこの上もなく大切にしなければならぬことは同じである。しかし、チカーノの住むアメリカの世界と我々の社会の距離と落差が少ないだけに、対象の政治上の訴えに賛同できる姿勢がない限り、調査は不可能である。

インフォーマントのクラス差はむづかしい問題を提供する。アルバカーキーで下層から中層階層のチカーノに会っていると、自分の方でも相手の階層差に応じて変化しなくてはならない状況があった。中産階層のチカーノと話す折はスペイン語の語学力の不足をつくづく感じた。また、彼等は必ずといっていいくらい、調査の目的と発表形式にこだわった。当然の問いであった。地域社会で確固たる地位を築いている人々にとっては、調査の目的と発表形式によっては答えたくない質問もあるはずである。

いずれにしても、外国でフィールド・ワークをした時には、データーと分析の部分は外人にも読める形で発表することが研究者の社会的責任であることを身につまされて感じた。

まだデーターを整理していないので、はっきりしたことは言えないが、二次調査が実現するようなら、次のようなテーマを考えてみたい。1. チカーノ文学にみる文化的特性と現実のギャップの問題、2. アルバカーキーの若い世代のチカーノに文化的特性が伝達される方法

について、3. アルバカーキーの中産階層のチカーノは文化的特性をどの程度まで保存し、喪失しているか、の問題、4. 北部ニュー・メキシコの町ラス・ヴェガスにみられるアングロ系アメリカ人とイスパノの社会・文化関係の調査、5. サンタ・フェ鉄道につとめるニュー・メキシコ出身の労働者がカリフォルニアにつくった町バーチトウの調査、などが今浮かぶテーマである。

### 3. スペインの社会人類学的研究のこと

私はかねてよりスペインの民俗社会に興味を持っていたが、入手した民族学、社会人類学上の文献は数少なく、誰かスペインの専門家に会いたいと思っていた。今度幸いにして Karl Schwerin 先生宅のパーティーで同じくニュー・メキシコ大学人類学部の Richard Barrett 助教授と会えた。同先生は新進のスペイン専門家で、ちょうど3度目のフィールド・ワークを終えて、スペインより戻られたところであった。

スペインの文献の中には都市化を扱った研究が多く、扱われているコミュニティも伝統的なものはほとんどない。コミュニティの選択の仕方にもよろうが、フランコ以降のスペインが経済発展のため、急速に変容したことは衆目の一致するところである。これは同先生のモノグラフにも明らかであるし、本人も強調されていた。文献も数々御教示いただき、今回 Barrett 先生にお会いできたことはまことに幸いであった。

アルバカーキーでの生活は77日の短さであったが、豊かな日々であった。9月末にはここを去り、テキサス経由でメ

キシコ市に入った。

#### 4. メキシコのチカーノ研究者

アメリカ合衆国でのチカーノ研究の大筋を理解できたが、メキシコ人学者によるチカーノ研究については何もわからなかった。メキシコ人がこのテーマをどのように扱っているかを知ることは興味深いことであった。

チカーノ研究者としては Jorge A. Bustamante 先生がコレヒオ・デ・メヒコの社会学部におられると聞いてコレヒオの場所に行く、大学はサン・アンヘルより遠いカミーノ・デル・アフスコに移転していた。テレビのチャンネル13という場所をたよりにタクシーを飛ばすと、野原に新築の大学がたっていた。社会学部を訪れると、先生は研究室に在室であった。

Bustamante 教授は若手の社会学者で、おもにテキサスのチカーノの実地研究をしておられ、その関係の論文を数々下さった。また、同教授は Echevería 政権下では不法入国メキシコ人をめぐるアメリカとの外交交渉を検討する委員会に参加されていた。テキサスのチカーノは特に搾取されているので、Bustamante 教授の反アメリカ色は強かった。『メキシコ人にとって大切なものはサウス・ウェストのチカーノである。他の中西部や東部のものには殆ど興味がない。私にとって、チカーノ研究はメキシコ系アメリカ人を保護するためにある。研究に中立性を求めてはいない。私の研究は主観的な利害にもとづいている。』という明快な意見をはかれ、これは実に印象的であった。

ニュー・メキシコではチカーノの存在の形もテキサスと相当異なるし、私とし

てはチカーノの気持もアングロ系アメリカ人の立場もわからぬではないので、Bustamante 教授のようにナショナリスティックな直裁な発言はできない。一体、日本人としてチカーノを研究するということは根本的にどんな意味があるのか、とつくづく考えたことであった。

他日メキシコ国立自治大学で文献を探したところ、メキシコからの労務者をめぐるメキシコとアメリカの外交史関係がほとんどで、チカーノ研究に目ぼしいものはすくなかった。Manuel Gamio の古典的なメキシコ系アメリカ人のライフ・ヒストリー物、Joan Moore の概説書のスペイン語訳本、Rodolfo Acuña の *Occupied America* のスペイン語訳があるだけであった。やはり、チカーノ研究はアメリカが中心であり、メキシコでは研究の手がそこまでまわりかねている、というのが私のうけた印象であった。

#### 5. 再び目にしたミへの村々

1年8カ月ぶりに再び訪れたミへの村で私は余りにも多くのことを感じた。ここでは短いミへ滞在中に何を私がしたかだけを記録しておきたい。

日本でデータ整理中に会った質問に答えをえた。また、幸いにもガバン(ボンチョのような外衣)を織る全工程をみることができた。これまた奇遇としか思えないけれども、なかなか正統らしい占い師に会えて、綿密なインフォメーションを得た。このデータは以前から私が占い師についていただいていた仮説を裏づけるものであった。

トラウィ村のナルシサ婆さんを訪れると、雨にとじこめられた夜だったせい、婆さんは話し止まず、チュパドール(患



部をすって病を治す人)の民話を話してくれた。婆さん推薦のチュパドールに会えるかもしれないという前日、車の都合で私はミへの村トラウイを去った。

メキシコに戻ると、ちょうどグァダルーペの新しい会堂の落成式の日にあたり、

これを見物した。次の2日間は念願の巡礼地チャルマとロス・レメディオスを訪れた。トラスカラのオコトランとグアハラハラのサン・ファン・デ・ロス・ラーゴスは次の機会に残した。